

糸魚川 創業 慶安三年(1650年)
大火 加賀の井酒造株式会社



焼失前の加賀の井酒造

延焼で蔵全焼、新潟最古の蔵元の危機

新潟にありながら「加賀」の名前を冠するのは、蔵元の小林家敷地内に加賀藩糸魚川本陣が置かれ、前田利常が献上された酒をいたく気に入り、加賀国でないのに加賀の字の使用を許可し、銘柄を「加賀の井」としたことに由来します。

小林家は本陣の役と糸魚川の町年寄を兼ね、幕末まで踏襲していました。

昨年12月22日に発生した大火は強風にあおられ町を飲み込まれました。火災の第一報を昼に受け、小林大祐取締役役に電話をしたところ、「避難勧告が出たので避難しています。延焼しないように消防が蔵の建物に放水しています。」とのことで、近

生産者通信

NPO法人
米ニケーションセンター
定価 100円(送料込)

火見舞を持って午後2時過ぎに糸魚川市に到着しましたが、蔵は全焼状態でした。改めて延焼の恐ろしさを知りました。

25日には消失を免れたものがあれば弊社倉庫で預かるつもりでトラックで向かいました。中越大地震の際に、被災した取引先の被害を免れた味噌や包装資材等を預かった経験から、今回も蔵が再建するまで物資を預かるつもりでした。

しかし、火災は全てを燃やし尽くしていました。金庫の中身も書



瓦礫の中燃え残った、高度精米した酒米

類関係はきれいな灰になっており、わずかに焼け残ったタンクの酒もすべて焦げた臭いが染みつき、飲用としては適せず全量廃棄となります。

○兄弟で蔵を盛り立てる予定が：

18代目の小林大祐さんの弟・久洋さんが12月末に勤めていた会社を退職し、糸魚川に戻り兄弟で酒造りをする予定でした。しかも、久洋さんは12月に子供が生まれただけで、1月より加賀の井酒造に入社し兄弟で酒造



蔵の横に駐車していた従業員の車にも延焼

りの夢は、火事により一瞬にして真つ暗な状態となってしまいました。

○酒蔵と生産者は一心同体

加賀の井酒造は新潟県産米で仕込をしています。蔵元がなくなるとその分だけ米の使用量は減ります。その意味において酒蔵と生産者は一心同体の関係にあるのです。

30代が盛り立てる若い酒蔵は、生産者にとつて最良のパートナーとなるはずでした。

○決意を新たに再起！

18代目で不本意な結



加賀藩本陣跡を意味する看板は焼け残っていました



毎年「元旦しほり」で忙しい正月のはずが：

末は迎えられませんが、新年を迎え蔵の再建を兄弟で誓いました。ぜひ、生産者の皆様からも応援をお願いいたします！



タンク内の酒にも焦げた臭いが染みつき、使い物になりません